



集義外書

九十

□ 13
361
6



集義外書卷九

脱論六



一公友向く云佛者とは輪廻といふ儒道といふは次目の義は毛虫の蝶と
ぬて飛ぶやと云は生きたるを云ふ事し有る人々 是て云む
我友禪を説て云座禪は事し何の事と云ふを問ふ佛何の
益有禪者の云衆生皆輪廻と云ふは悟てぬ仏を問ふ二友
生滅する我友云云云と云ふは死する見しを云ふ根は
久しと云ふ造化の真理を云ふは事し何の事と云ふを問ふ
千も万も云ふ造化を盡す事し何の事と云ふを問ふ
いふ事なり 又その造化は事し造化の云ふは事し何の事と云ふを問ふ

佛法とあるべき故なきものあり

一む——我々友禪者も同て云今の津首蓮太郎も云う 禪者

て云釈家の糟糠佛を我々の尾端に真云とて仙とて神と

やり——て佛者の秋あるものし法陽師の居るものし天竺の

経説よかりとて吾々の免の足はむとて——又真云とて

似る其業とてあはれ此禪は——我々宗を佛心宗とて悟を以て

吾等と我々友の云人の云はれとて其の云はれ何とて——

天竺云禪者もむ——とて我々有つめ今人民の賊に馬場の

子孫を我々縛りて悪とて——とて糟糠尾端と書き害たる今

佛者も天下の害とて——其の云はれん禪の云はれ

花の有時分は左風吹くも移るを我々を以て我々天下の

万民を以てめられ——我々餓死せしめて己人の利とて我々の云はれ

一向蓮太郎の弟子とて我々我々の其の云はれ我々我々の云はれ

功德とて我々我々の云はれ蓮太郎の云はれ法華とて——

我々我々の云はれ我々我々の云はれ我々我々の云はれ南を

妙法蓮華とて我々我々の云はれ我々我々の云はれ我々我々の云はれ

云これ——とて世界の悪意あるものし糟糠とて我々我々の云はれ

是れ我々の云はれ我々我々の云はれ我々我々の云はれ我々我々の云はれ

我々我々の云はれ我々我々の云はれ我々我々の云はれ我々我々の云はれ

我々我々の云はれ我々我々の云はれ我々我々の云はれ我々我々の云はれ

弟——きこゝの入道も、
 二とに人勝工うと現るゝに市井の者我いふもの
 なつてつゞくとする人の言をてすめあところきは後
 は害ふなるゆゑ——
 書らるゝは於てもあるべきものなりとの深愛なくま
 の道と志すハ
 何事ともあらざるに如しそ是より似たる能となり
 若くも是れあり
 をうむるゆゑ——

一、公友同小郡を過た公事所迄とありて是よりなり。所要の人を兼ねて、
玄國郡道と告ぐ事久し。故に士もむき民もうる古の罪人と
今の者へし悪人を穿鑿令へ。もとめは公事所なるものへ生れぬ下
ある民間の士のつゝ易にねむりし。も悪人よて天乃も罪よ阿くこめ
し。とぬる人多し。て去る所の勢に下の勢と見ゆる人多く、悪人

不善人は、おろろと神にきこえりて、人おろろのとて、おろろとて、おろろとて、
 まるく、此道の者あり、あつて、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、
 うそて、あつて、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、
 不得也——とて、罪を、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、
 時とて、罪を、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、
 多し、時とて、悪人の、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、
 方、多し、大勢なり、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、
 ゆゑ、人を、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、
 罪を、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、
 いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、いづくも、

[illegible]

一 孝友同むるは、孝友、徳義、公事、あるは、といふ法ある人の物とするを
 思ふに、これ、乃、理なり。―― 孫、乃、を、初、より、思、は、れ、り、も、の、今、を、思、ふ、の、あり、な、れ、
 の、思、ふ、は、飛、ぶ、や、り、而、し、沙、汰、す、ま、ま、な、る、や、云、理、由、と、い、は、な、れ、
 なるも、も、毎、の、徳、を、あ、ま、の、は、な、る、に、む、る、は、乃、り、偽、義、の、も、て、思、つ、て、な、い、
 情、徳、の、あ、る、も、る、而、ある、を、天、下、を、天、下、の、天、下、に、と、つ、て、金、銀、第、一、の、天、下、

天下の人の為に生ずるものなれば、もろ人の私すべき事あるは生かざる時貴
族とも一夜を著て一物をもたぬ金銀ハ貧賤富貴の命よりと
あつて来世に代へ子孫に傳へるものありと此今日にう有ると思ひつゝ
人のものとする天下も即ち又あらば貪たるものは富むるものなり初ハ人
心とわけていて思ふにわづらふ事なることありて思ふに富は只利をせしめ
ざらんが爲に——久き事ゆゑに富むるものあり又奢て用ひてはくさるゝや
奢て借債してたりて思ふ者あると又死ぬることを知り何のね
えもなく死すや——きん根を思ふの有りなきのふいふ——
あるが——あらあ——おのこの世こそ罪をきく時は理帳を
する者なく事の上りとなす——善惡ともこれよくあらうと云ふれ
人よ此の利をとるべからず此世事をきく是財ふにふれ——
あつたれば欲求べき時利を得て利をとりて多きものあり又その利の
あつたれば福を天賜とく——私に——私に——私に——
欲求するところあり二重財用の流れるは弊のうつりゆく
それを見てもこの情勢は家申へいふなり——百姓は代官
おとしにけしきもこれにはかゝるにあらうと云ふことせんが府
に百姓とも困窮して清くはる海色も——なるもので四海困窮せば天禄
たうと絶んとする人のためなり——國郡も憂ひあるものに於て多
くの令分はあつて知るところに——
我々の所得の難とて徴するに及ばぬはあつて民の困窮
初はこれなり——あつたるといふたなり——同者は思ふも

一日蓮宗の教をいつたる要人も新田河津院に於ての如く佛をうへりといふこゝに昔も還り来りしむじあることも人として思ふべきことなり
事あるに非ざるに仁我神をたてし人をも固くし生後より要人とすべし
もろくも人をいへて今成佛の教を以てけり世の垂問を温はれりて繼中此
磨も磷ももんや佛法の教へたる今よりいふ人

一 人友同世る次第より人人の生きたる何そや 云風俗の如くなり

ゆへに王代は王ふりて三種の神を仰ぐて御力をさうめきと
皇仁勇の徳ありて天下にのちありてあることをいふ——くみそあり
初より深澤和院并に院を館院のまじり有り守護國司と成りの人々成
るるもて諸よりいへて四郡つらきもまじり有りけり凡そ海あり

あつて王者の威をうけて武人志士あるも武家の代となりて後を
人民の教の道なりきと事關とありて事とせんをたてしもの
教に佛者よのちありて佛敎の初より人の善をよきて善きことめん
且説王代のうちありていへば浦者よりいへば山あり人の善をて——
善をたてしものけり人として善のなりきなり——く秋心深き思ひ
善き時分なりて武する者金銀米穀の事、利得のものなり料理する
又敬の言成なりて文武の二方なりていへば——とありて侍従管法乃
あそむる馬のさう代りの名將勇士の如くありて今も武士の如く
つらあき人の命の——文を儒者治るの——侍従管法乃公家
の事——つら武勇は武能なり——とありて長坂飲食部在諸君々々々々

公人より誠にて貴し。と人々多く稱せしむるれ知りたるやあきとも
 なるるに。君の大事の用をきく人々の抱ねおたのむに

一 孝友云今の世の武士の情ハ只仁を以て其道なり也

[illegible]

民の困乏は、
 兵を遣ふに
 費するに
 財を盡すに
 民を苦しむに
 國を危くするに
 是れも亦た
 民の困乏なり。

天爵をくや凶卒の外に立寄るゝ家臣のもの軍人——難儀をいふ
ありと着然あといふは國亡む事なりといひて後日朱百姓と云ふけり
と——そいふこの難をあらふものといふをきけ——男と亡——事あり
難儀をせむする事を解やと意のふに武士の族あまはきといひぬなり
とて難儀なりといふ事とて敵をいふはもつて百姓は年中辛苦して世に

らんとゆへに年貢より税甚しき人なり——とあるとたれに信憑あり
らむと云ふこと——田島山林牛馬すくも——うとていふことハ百姓
家をぬぐひ流浪——約方なきものは乞食となりきなり——村里
もさるる所——凶年ハ穢死すぬぐも次是——さうのは有家の
別ともち次水と危き木馬なりとのせめなり——おとりにて病
はきりて死——中と病者なりとて用ふまじきもあり——いむゆへ
うへへもさる凶年とて百姓の甚きものなり——田島山林をぬぐ
りて賣るなり——富人なり——貧乏なり——さうのものを村里
か——あてなり——かやうな——免とてきは富人も諸百姓もはきり
きり免とてなり——富有の民なり家百家の用は二家あり
て百姓ゆへに奢とてつるなり——豊年ハ薪葉とてうり木の葉なり
うり何その税は事なり酒賣とてなり——有り大勢の事をぬぐ村より三
つゆても城下の町人なりおかしきなり——いふことハ百姓もさるなり——富有
なり——彼も人なりもの事なりもさるなり——いふことハ百姓もさるなり——
あつたなり——あつたなり——いふことハ百姓もさるなり——酒賣
なり——いふことハ百姓もさるなり——いふことハ百姓もさるなり——
人なり——いふことハ百姓もさるなり——いふことハ百姓もさるなり——
ちり——いふことハ百姓もさるなり——いふことハ百姓もさるなり——

一 孝友と世の勢とあるのは金屋帳事——二國の中何の用もきりたる親の税
として知りて取家人成り——百姓もさるなり——いふことハ百姓もさるなり——

事ある者も助てうきむ——いんや人のうきむてあをむいん
あを——ききしうのふ西もていんする百座の地獄をばき佛をね

念佛題目ありの事ある者死に事ある——地獄の亡ぬ
そのわきみとてききしうとていんする百座の地獄をばき佛をね

一孝友同我書友三年の喪はとるんて山家（山家）の平日のん

あは又病着しんわてくわり云是るん故ある喪の名うせ

世のふんとするん——事なうてれるん人のききしうぬきもわり

のききしうも勢もあり三年と久しき事ある喪とて退居をけ其中

も人もあるん——ききしうにわてくわり同もききしうぬきもわり

そききしうの君子の礼とていん人の相繼てくるんききしうて日本

中も地氣うす——人の根気はうききしうにわてくわり同もききしう

はききしうとていん人の相繼てくるんききしうて日本

すききしうとていん人の相繼てくるんききしうて日本

はききしうとていん人の相繼てくるんききしうて日本

はききしうとていん人の相繼てくるんききしうて日本

一孝友同我書友三年の喪はとるんて山家（山家）の平日のん

あは又病着しんわてくわり云是るん故ある喪の名うせ

世のふんとするん——事なうてれるん人のききしうぬきもわり

のききしうも勢もあり三年と久しき事ある喪とて退居をけ其中

も人もあるん——ききしうにわてくわり同もききしうぬきもわり

とやうなものをゆへんまゝに今の惣旨を佛法の如くの出相に百年の月三
分のち分る三分一なるものなり——
印書しては惣意は道徳の必要として
す——て遺ふ——て著せしむる所をいつては長久なる事と知るを得て天
よりそのきこゆる斗——てすいびと見るも今のお題目より、仏法の要の事を欠
きはらぬらんことをあらわしめんと水のあそびあり

[illegible]

信者あり——諸人貧乏なり——先王孝成王のむす子なり——
 近き人——昔周礼世もなりなほ三千年の居る十分ものなり——
 うして治世の時ある文をわけて人への服あるは、佛者の
 云と信せん——大清王——先王と云く——千年の聖王にせん
 とその奈と云く——百年の後に佛道無き——天下太平なり——
 吉利と丹の玉とある——云く——佛法をえんとおもひて
 昔云く——佛と云く——佛と云く——佛と云く——佛と云く——
 云く——山に草木人物の情と情と云く——見ゆ——易者の言を——
 易者を——易者あり——佛法を——石仁なる——易者あり——
 易者あり——日本の水土は——易者なり——この地は——千餘年——
 易者あり——日本の水土は——易者なり——この地は——千餘年——

近年、仏者の奢は、仏法のつちなる易筮を考む俗人は久しうき

天に事あるをそとすいひのしるはるるを
同佛者ふに

なること易易を以て立修に易道の仁政易易なるはいう斗後

あゝは神の足跡を西戎の異法にむかふらんや

善云易男の善を以て水王よけを著あつてゐる
 善云王を以て

とて世う争ひゆきとも皆易き事なり——予毎々本蘭文

いん
りんとともに
莊老の如く
是の如く
公の如く
一

[illegible]

やうなものと
猪牙となりぬ
日印の水を
は周の礼の
極なる文飾
なりといふ

あまのくさくはつまるる理必廻し周の礼法よりして老荘の

道ともいふ
まゝそち男となりて
天下より利を
後世にのつて
事なりと

実々老花も何もある
天上雲の何ものも
下水をよめるのち
乃て波紋をよめる

ふふあ人といふよりを云ひしは海もいふにあらむそつたぬハ予の爲

るを結もそしつとねそきていふは後世知人あり猪舌を用いて乳うぬ

多時予に云殘るる乃ちむを——
 龍と上右の神乃ち久——
 神

立てる所ニ一の法もあらず
仙都の流もなからず
易学の旨成

判ひて知やとてあつひや此きちたふしんすなりけり今の學者は儒に

と真記はるるを
ふりくはるるを
助くるるの勢を
くはるるを
くはるるを

のふけと儒者の理滞と昔は神をなすもの一也その中より仏法は水より

子子処ありて儒法ハ水土ニ適せず是ハ乱起る由也
 仏法も亦其ノ所ニ適せず

と見ても大盛の如く仁義より合せぬ事なれどもかゝる時におきましても乃
ち此は其徳の如く帰し——————————————————————
と云ふ事なれども——————————————————————

一儒者云我々儒者として道を行ふは此の如くは又それの如く人とは異なること
有り今附るやれども予も亦た是れの内を我くするなり——————————
する者なりはれども凡そ名利の欲あり——————————————
を——————————————————————————————
ぬるを以て徳とす——————————————————————
はる或る自清——————————————————————
はる或る名を承めて行く者も有我々行ふ事なれども人のかゝる

を————————————————————————————
抑應對進退より初ておぼしむる者も有る——————————
はる或る或る或る或るの如く——————————————
を——————————————————————————
らるる事なれども————————————————————
つとむる事なれども——————————————————
ひて——————————————————————
喪の如くも或る事なれども喪は此の如くものやうな事なれども大なり
心のとて————————————————————
名にとて————————————————————
名にとて————————————————————

とつての学問のいふ一流の事とて——それこそ世に知られたる理と
あつて詠とてきつとあき先にも——
おのゝちなるか、小戒とていふ
たのふぬいけなす。何れもわづらひたるを——又一人
予は親も人あり道と信するも——
時を信するも知人情時
愛する連中、氏の氣向をうけて男也と云ふなりとまて人を
ちりり——先ず——むすこ——うて云ふも、我も是れ世の習と
なり風俗の——うてうて——あつてもわづらひたるを人なりとて
あつても世にわづらひたる——あつて年久——
事とは義と
いふは理ありぬ——
理ありぬ——
は我の——
ききり人哉——
明道伊川、
賢人、
東坡、

博學の中——
凡そあつて又男也、
我も是れ世にわづらひたるを人なりとて
いふは理ありぬ——
理ありぬ——
は我の——
ききり人哉——
明道伊川、
賢人、
東坡、
博學の中——
凡そあつて又男也、
我も是れ世にわづらひたるを人なりとて
いふは理ありぬ——
理ありぬ——
は我の——
ききり人哉——
明道伊川、
賢人、
東坡、
博學の中——
凡そあつて又男也、
我も是れ世にわづらひたるを人なりとて
いふは理ありぬ——
理ありぬ——
は我の——
ききり人哉——
明道伊川、
賢人、
東坡、

りこるむ何なりしなきとも陰陽の理を人のこゝてみるは理といふや
かへり抄量つべきも分りし信よりいふともうその様をみぬのも女也
のさるもわれも男也といふは此二つよりわかれざるは然りと風俗よりせ
可し向ふはさるの若年も男也をぬきたるも
のさるなる者のより一丸がきとておと通羅をいんを用ひれど乃無きん氣を
用ていともいふは本年きつものハ程の目より一丸をきつんとされ水氣
多くて大なるぬきとて人の精はより一丸をきつて無き用ひていふぬきを
ききてすこしはいしはききし書のかい

陰義外書卷之十終

